

研究公開文書

2023年 10月 6日

研 究 名	脳卒中片麻痺患者の筋厚の違いによるADLとの関係
研 究 の 概 要	<p>脳卒中は高齢になるほど発症率が高くなると報告されており、高齢化が進む日本においては全体の発症率は高くなると予想される。脳卒中の死亡率は近年減少傾向だが、発症後の障害により日常生活動作能力(activities of daily living:ADL)や生活の質(Quality of life:QOL)は低下する。</p> <p>脳卒中後のADLと上肢機能は関連があり、上肢機能には上肢筋力を測定することが有用である。しかし、脳卒中急性期に能動的な筋力を測定することは困難である。</p> <p>超音波画像診断装置は筋肉を非侵襲的で受動的にモニタリングできる機器である。超音波画像診断装置による筋厚の測定は筋力測定の代替手段になると考えている。そこで本研究の目的は、上腕二頭筋の筋厚を超音波画像診断装置を用いて評価した上腕二頭筋の筋厚がADLに与える影響を検討することとした。</p>
研 究 対 象	包含基準：脳出血または脳梗塞で脳神経外科に入院した患者 除外基準：発症前の modified Rankin Scale (mRS) 5以上の患者、研究に対する同意が得られない患者
研 究 責 任 者	小田原市立病院 リハビリテーション室 小澤哲也
研 究 実 施 期 間	研究許可日～令和9年3月31日
連 絡 先	小田原市久野46番地 小田原市立病院 0465-34-3175